

六 二度の上海行き

二度目の秘密出版

米騒動の直後、金沢高校へ遊学していた祝振剛が訪ねて来た。彼は流暢なエス語で、久し振りに上海の同志のニュースをもたらした。それは、しばらく間遠になった中国同志との通信が、再び始まるきっかけになった。

それより少し前、山鹿は、だいぶ自分の自由裁量が許されるようになったので、点林堂でエスペラント普及のパンフを作った。そのことで、京都のエスペラント内野仙治、竹内らと知り合いになった。そして、京都エスペラント会を作るべく動き出していた。(しかしこれは、後述の秘密出版発覚で流産となった。)その後引き続き『エスペラントの鍵』——世界各国が同じ形式で出しているもので、文法と辞書から成っており、これ丈で簡単なエスペラントが駆使できる極小冊子であるが、これを小坂狷二と共編で、やはり点林堂から刊行した。これは、その後のエス語運動に大いに活用された注目すべき出版であった。

この二回のパンフ刊行に味をしめた山鹿は、点林堂の業務のほとんどをまかせられているのを幸いに、今度はアナキズム宣伝のパンフをも秘密出版しようと、秘かに準備を進めていた。すでに山鹿は、月一回大阪の同業者との打ち合わせといって出掛け、大阪の同志の例会に出席したり、武田伝次郎らと連絡をよく取るようになっていた。その同志たちが何より痛感していたのは、アナキズム伝道のために必要なパンフや冊子類がないことであった。

そこで、まず手初めに、幸徳が死刑を前に磯部、花井等の三弁護人に送った長い手紙で、アナキズムの何たるかを説いた文章をそつと工場で組んでみた。それは天地六寸の紙にベタ組みで二尺以上のものになった。やっと出来上がった時、スパイが親戚をあさりはじめたので、一枚も出さぬうちに家人に焼き捨てられてしまった。次は、石川三四郎が『西洋社会運動史』の中で書いている「パンの略取梗概」をパンフの形にしたものであった。表紙はパン略の出版広告の形で、でたらの出版屋の名を入れた。点林堂ではやりにくかったもので、同業者のところへ取次の形式で注文した。本屋の広告と違って安心してやってくれた。それともうひとつ、経済論叢に出た京大の米田庄太郎と河田嗣郎が書いた、サンジカリズム研究の論文を骨子に、彼がまとめた日本の社会運動史のようなものと組み合わせ『サンジカリズム』というのを作った。ついでにエス文のポールベルテロ著『平民の鐘』を印刷した。これは師復から伝えられ、山鹿の生涯に影響を与え続けたものであった。

ところが、パンフ類が出来上がった時、頼んだ下職の印刷所に争議が起こった。職長がバクチ打ちのゴロツキだったので、秘密出版とカンづいて資本家を脅かした。その資本家というのは印刷工場を人任せにしたお寺だったので、坊主どもは驚いて警察へ訴えた。二月一九日夜パンフ類を受け取った

とたん、情報がはいった。急なのでパンフを配布発送する間もない。ともかく隠す必要に迫られ、近所の薬屋上田蟻善に電話した。彼は堺の『へちまの花』の愛読者だったシンパで、顔がひろく、祇園町などによく出入りしていた（米騒動の時、大杉を祇園へつれて行ったのは彼であった。）電話すると上田はすぐ人を出してくれた。そして運んで匿した先は、彼のなじみの祇園の待合だった。

——二〇日早朝、私は寝込みを襲われて、五条署へ引っぱられた。お定まりの、「知らん」「忘れた」と、のらくら問答をやっていると、続々呼び出されてやってくるのが、舞妓や芸者ばかりだったので、五条署のなかには、時ならぬ花が咲いた。朝めしを食っていなかったので、弁当を注文した。一粒残らず食べて、ほっとしていると、小使いが空箱を取りにきた。それから顔をシゲシゲみて、刑事と何かひそひそ話をしている。どうしたのかと聞くと、「いや、あげられてきた最初、こんなキレイに食べるものはおらん。先日も国粋会のモンが沢山来たが、弁当を平げたヤツは一人もおらんなんだ」と感心したように言った。そんな風に私はタカをくくっていたが、それにしても何となく物々しく、警察の取扱いも変なようであった。後で判ったことだが、パンフの内容が不敬罪にあたるということで、大騒動だったらしい。そんなことから、国粋会の荒虎一家が、三条の私の印刷所の表ガラス戸に石をぶつけに来たということだった。

さて、法廷で検事が朗読する起訴状には、押収したパンフ『サンジカリズム』の一部が抄出されていた。その「一九一一年一月二四日、幸徳伝次郎等一二名は時の天皇を殺し、社会革命を企てんとしたる故を以て死刑に処せらる」というのを、「天皇を殺し」の五字のところは無言で読むという芸当を検事はやった。そして「日本で、これほどヒドイ文字を用いた者は未だかつてな

かった」と極言した。出獄後に聞いたところでは、この五字のため、もう少しで知事が進退伺いを出すところだったらしい。

弁護士であった勝本博士は、大学図書館から仏文の『パンの略取』を借りてきて、「これが被告の出したものの原本だ。『パンの略取』——フランス語ではコンケール・ドウ・ペンという。

大学でも研究している。この本の内容が実行されたら、この世は極楽だ。どこが悪いか、被告は無罪である」と、大弁論をはった。一方検事は、出版法の秩序ピン乱は最高二年だから、四種類の秘密出版に対して八年の最重刑を求刑した、これに対し裁判長は、「弁護人の言い分は真理であるが、被告の行為は出版法に違反する」として、禁固三年の判決を宣告した。

獄中余聞

——控訴したので身柄は、大阪の若松拘留監にまわされた。罪名が出版法違反となっていたので、エロ本でも作ったと思っただけ、初めは雑居房入りだった。房内はたちまちアナキズム道場となった。同房の囚人のうち二人は米騒動であげられたもので、大阪の荒木は死刑求刑で無期、和歌山の辻悌次は騒擾罪で一〇年、他は殺人の八年とトバクの三年の四人であった。

荒木は行商人で、鈴木商店が時の朝鮮総督後藤新平と共に謀って朝鮮米を買占めたために米価が上ったと考えた。それで仲間たちと元兇鈴木商店焼打ちを計画したのだという。しかし放火すれば消防隊がくる。そこで別に抜刀係を備えて、その時は消防ホースをプチ切る用意をした。まず一人が三階建ての鈴木ビルの雨樋をよじのぼり、窓から入って玄関の戸を開いた。石油罐をか

ついで数名がわっと飛び込んで行き、罐をふみつぶしてマッチを擦った。火の手が上がると果たして消防隊がきた。用意の刀でホースをズタズタに切ったので消火ができず、ビルは完全に焼けた。計画的とみた警察は、見物していた群衆の足元を懐中電灯で照らして調べた。それで下駄をはいている者は助かり、靴や草履ばきの者は、みんな逮捕されたということであった。

控訴の結果も、やはり三年で変わりなく、山鹿は大阪堀川監獄に移された。改築移転の最中で監房が空いておらず、山鹿はしばらく懲罰房に入れられた。

——そこは特別ひどかった。床は一段低く、フutonは綿が玉ころになったボロボロのもの。冷凍室のような寒気が、体の芯まで浸みとおった。それで、今度出たらもう二度とつかまるまい、どんなことをしても逃げようと決心した。うとうととしてハッとさめる短い夢は、いつも暖い南国のことばかりだった。後年、台湾、フィリピンへ行ったのも、この時の寒さがつくづく身にこたえたせいでもある。また、堀川監獄に指紋をみる名人がいた。多くのフィンガープリントをみて「君は好奇心が強いようだね」と言っていて、ヅケをみて「成程、幸徳秋水の残党か」と言った。かえりみて、ぼくがここに至ったのは、そもそも好奇心から出発したに相違ないと思った。

その堀川監獄が、全面改築のため全部取り壊され、囚人は一時堺に移ることになった。赤い囚人服を着た囚人たちが、何十人と群がってみるみるうちに監獄を壊していくのを見て、パリ革命のバスチーユ監獄攻撃もかくやとばかり想起して痛快に感じた山鹿であったが、ある日、堺ではなく京都監獄へと移送された。

京都監獄は、幕末のままの旧式木造の独房であった。これからさきの獄中生活をどのようにやって

いくか、できるだけ要領よく、自分のやりたいことをするためにはどうしたらよいか、といういろいろ考えた。禁固刑だったから労役はなかったが、まず封筒張りを志願した。普通は一日千枚ほどのところを、少し慣れて工夫すると、楽に二千枚をこなせるようになった。そして間もなく、「課定終了ニ付課定風呂一週一回ヲ加ウ」「時間前読書、筆記、房内ノ運動ヲ許ス」の特典を受けるようになった。これで山鹿は、どうやら念願の筆記具を使えるようになったし、そして取り寄せた本をもうもり読み始めた。

——そのときやったことの一つに、ローマ字のペン習字と、左向き書きの字がある。独房では、きれいな水が一日中出たので、いくらでも使える。私は朝からこの板の間に、雑巾に水を浸して、板の間いっぱい大きくローマ字の手習いをやった。大きい字が書けさえすれば、小さなペンで書くのは楽なものである。そのうちノシを折る作業を与えられた時、ブリキの型を使ったので、それでペンを作って水で手習いをした。そして私は山鹿流と名付ける東洋風のローマ字書字体を作った。左向き字は、普通に書いたものを鏡に写して手本にするのだが、私はそれを写真にとったものを差入れさせて練習し、すらすら書けるようになった。

(ペンで細かく書き込んだ山鹿のエスペラントや英文などの各文字がまぎらわしくなく、はっきりと判別されるのは、獄中の練習が大きく役立っているであろう。)

山科のかくれ家

一九二一年(大正一一年)二九歳の秋、山鹿は工賃積立金百円也の支払いを受けて出獄した。とりあ

えず点林堂で働きながら、弱った体を休めることになったが、家の者の監視もうるさく、その上早速尾行が付きまとい続けた。また秘密出版事件は、京都中を騒がせたりしく、友人たちも彼から遠ざかって、顔をみせなかった。山鹿は獄中で出獄後の方針を一応たてていた。それは、当分うるさいだろうから表面上の運動には関係せず、せいぜいシンパのふりをして、機をみて地下へもぐるということだった。そしてそれを和田久太郎にだけ、そっと打ち明けておいた。

丁度、山科の日の丘に小ブルジョアの別荘で、息子が結核で死んだ後空いている所があった。そのはなれを借りることにした。小さい二室だけだが、高台で見晴しがよかった。まわりは小山で簡単には外から来れず、交通は京津電車だけだから、尾行も隠れてつてくることができない。点林堂へ通うのには遠いが、絶好の隠れ家だった。時々、和田久が尾行をまいてやってきた。(夜中に来て、早朝山越えをして大津へ出ていくのが常だった。)久板卯之助がふらりとやって来て、「ええとこやなあ」と泊まっていたこともあった。こんなエピソードがある。ある夜遅く、和田久がやって来た。ちょうど月末で、山鹿は点林堂が忙しく、泊まりこみで帰宅していなかった。ミカが引き留めたにもかかわらず、和田久は「妻君一人の家に泊まるのは……」と言って一人で山道を戻っていった。おまけに雨がどしゃぶりの夜だった。真夜中で、もちろん七条まで帰る電車もなく、どうしただろうとミカは氣をもんだが、「その頃のアナキストにはこんな律気な面があったのである」と山鹿は書き残している。

その和田が残していた伝言は、「東京へ出て来ないか、大杉も待っている」という上京をうながすものであった。たちまち、山鹿の心に火がついた。思い立つと寸時の間もないのが、山鹿の気性で

あった。その数日前、山鹿は上海から強制送還された佐野一郎を訪ねたことがあった。自宅で監禁中だった彼が、「なにすぐ脱出して、また中国へ行くヨ」という決意を語ったことにも刺激されていた。話をすれば、止められるのはわかっていた。突然のことにびっくりする妻をせきたてて、脱出の準備をした。もてるだけの荷物をもって、山鹿は秘かに日の丘を発った。四年ぶりの上京であった。一九二二年六月、山鹿は労働運動社の近く本郷神明町に隠れ家を作り、山路と名乗って住み始めた。それ以来三年間、警察は査として山鹿の行方をつかむことができなかった。

二回目の渡支

山鹿は生涯に四回あるいは五回、中国へと渡った。第一回目は一九一四年大連から上海へ、第二回目は、それから八年後の一九二二年夏、まったく偶然のことからであった。そして、その時の徳田球一や吉田一の背信行為は、彼がとくにبول嫌いとなる一因ともなった。それは、

——大正一〇年、秘密出版で禁固三年の刑をつとめ出獄したばかりは、和田久が上京をうながしてきたのを機会に、監視付きの眼を脱出して東京へ潜行した。この入獄中の三年間に日本の労働者の中で、勧められて革命後のロシアへ行って来た者が何人もあった。たまたまモスコイから帰ってきた吉田一(ピン公とよんだ)が、「おまえも行ってみないか。徳田球一が連絡係だから、彼に紹介して旅費は出させる」と言う。年来ヨーロッパ行きを考えていたばかりは、渡りに舟とピン公につれられ、浅草の二階裏に住む徳球の所へいって見た。徳球は「金は上海で渡す。ピン公と二人で先に上海に行ってくれ」といった。

早速、角帯姿に金ブラの指輪をはめ、安物香水をやたらにつけた紙屋の番頭にばけて、カバンには紙見本をつめこんだ。道中、刑事の首実験をたぶらかし、難なく上海に着いた。揚樹浦のユダヤ人街で、この家だというので訪ねると、引越してきたばかりというユダヤ人がいるだけで、全く話を通じない。「海岸通りの公園に行つて、来る奴に気をつけておれば必ず徳球がみつかる……」とピン公がいうので、毎日公園入口に寝ころんで、二人で待つうちに宿賃もなくなつてきた。とある日、一人の朝鮮青年が眼にとまつた。ピン公がロシアへ行つたとき出会つた男で、東亜共産党の会計とかいう。「地獄に仏」とその男をつかまえると、「徳田は、数日前に来て、金を持って帰つた。君らのことは何も聞いていない」——気の毒がつて十円ばかりくれたが、それっきりもう宿屋にも泊まれない、そこで一策を案じて右翼にばけ、北一輝のパトロンだった永田医院のところへ行つた。

「自分らは、北の命令で孫文の所へ行く途中だが、旅費が足らぬので頼む」と言つたが「今金がない。三階の病室が空いてるから、そこで当分食つていてくれ」——おそらく北に照会するつもりだろうが、ままよとばかり居候をきめこんだ。数日後、新聞をみると「飯盛元海軍中佐が次の船でくる」とある。彼は社会運動にもちよつと首をつつこんだ大本教のダダリストで、すこしは知っている。タカるつもりでその日埠頭で待つた。船が停船して、飯盛がデッキに立っているのがみえる。しかしその傍らに、特高スパイらしいのがいつまでも立っていて、近づけない。仕方なく帰つて、ピン公と三階の病室から表通りをみていたら、驚いたことには飯盛が馬車に乗つてやつてくる。しかも病院の前にとまつた。と、偶然にも真向いに旅館があつて、そこへはいつ

た。すぐ室がきまつたらしく、ちょうど三階から見える二階の部屋だ。直線距離で三〇メートルほど。何とか連絡しようと考えて、かねて腕に覚えの紙飛行機をつくつた。白紙のものをまず飛ばせてみるとうまくいく。早速「スパイはいないか。今夜会いたい」と書いて紙飛行機を飛ばした。うまく彼の部屋にとびこんだ飛行機を見て、飯盛は大きく字を書いた紙をこちらにみせて通信に成功。ところが飯盛がくれた金は、二人が帰国するにはすこし足りない額だった。はてどうしようかと考えているうちに、ピン公はそれをもつていちはやく帰国してしまつたのである。ピン公の理屈は——彼がロシアへ行つたとき、北京からガタトラックに乗せられて蒙古砂漠からシベリヤ森林地帯をとつた。その時ロシア人は各組合代表者に、その傘下組合員数によって上下の番号をつけた。それはもし狼の群が出たら、組合員数のすくない代表者から、自動車を飛びおりて狼に喰われる、その間にトラックは逃げのびる——つまりピン公にとっては、自分の方がより重要な人間だから、持ち逃げが許される、というわけであつた。

この吉田との上海滞在中、徳球から金を受け取つたら、山鹿はすぐにでも入露するつもりで中国同志とは全然連絡をとつていなかった。また吉田といつしよだったので、万一のことも考えて、素通りするつもりだったのである。しかし思惑がまったくはずれ、ピン公に素早く置き去られてしまつた。いま、中国の同志をたずねて、何とか帰国の途を考える以外に方法がなくなつた。

永田医院を出て、旧知をたずねると、山鹿の突然の出現を待ちうけたように、みんな大へん歓迎した。そして呆れたことには、彼らはすでに山鹿が上海に来ていることを知つていた。ただ連絡がないためと、他に疑わしい人物がついてるので、じつと注目していたのである。同志の中心は黄

凌霜（ホアン・リン・シユアン）であったが、彼はかつてレーニンに招かれて、モスコフへ行ったことがあった。その時吉田らも入露中で、たまたまレーニンと面会する場に居あわせた。吉田は感激のあまり「いままで自分はアナキストであったが、今日からはボルシェビキに忠節を誓います」と涙をながして宣言したという。それを目撃していたので、黄はなぜ山鹿が吉田といっしょにいるのか、不審におもっていたとのことであった。

A・Fと大同党加盟

そのころ、一九二一年七月、中国共産党は党员五七名でもって発足し、二二年七月には第二回全国代表者会議（党员は二三名になっていたという）を開くなど、ようやくその活動の影響を拡大しはじめていた。黄凌霜は、さきに革命直後のロシアに招かれてその実状を具さにみてきたが、それはかえって彼のアナキズムの立場を強固にするものであった。帰国して半年ほど沈黙したのち、彼は各地の同志と連絡をとり、A・F（アナルキスタ・フェデラツィオ）＝無政府主義者連盟を組織し、中国共産党と対抗して機械、印刷、紡績、電車、鉄道など上海の労働者への働きかけをやりだした。

彼らは、山鹿の話によって日本の労働運動の大勢を知り、それを動かしているサンジカリズムの理論と、具体的な戦術、そして何よりも実際の情報を知る必要を痛感したのだった。ちょうど、黄は渡米する予定をしていたので、途中日本へ立寄り、大杉らと連絡をとって情報の交換交流をする共に、山鹿もまた同行帰国して、黄を日本の同志に引き合わせることにきまつた。

その船便まちの短い期間、山鹿は毎日上海の町をあるいた。王伯府、李徳軒などと知己になり、ま

た師復の妹と結婚していた佩剛と久方ぶりの旧交を楽しんだ。ある日、「今日、A・Fの集会で新しい同志の入党式がある。師復以来、中国のもっとも親しい日本人同志として、君も入党しないか」という。もちろん山鹿に異存はない。上海の一同志の家で行なわれた入党式は、山鹿にとって初めての珍しい経験であった。

——まず新加入者を、室の真ん中に立たせ、それを出席者全員が手をつないで囲む。ついで当日の司会が出てきて、A・Fの誓詞を唱え、加入者が復唱する。一、不作弁官、二、不作軍人、三、不作資本家、四、不称姓、五、不喫阿片……（これらは師復の心社からひきつがれてきたものであった）そして最後に全員で、以上を遵守して安那其（アナキ）運動に努力することを誓うのである。そこで加入が確認され、A・F加盟の証拠として、手指によるサインを教えられる。まず握手。拇指の股を大きくあけて、相手の拇指の股めがけて速く強く押しこんで握る。これが日常のサインである。さらに一座に安全な同志ばかりのときは、両手を組み合わせて指を全部曲げてみせる。もし室内に他人が同席していて警戒を要するときは、組み合わせた両手の指を立ててみせる。遠く離れて合図するには、両手でもみ手するのがFのサイン。もう一方は、両手の人差指の指先をあわせ、拇指をまげてAのかたちにする。相手がサインをすれば、こちらはFサインをして互いにこの二つのサインをしてみせあうのである。（このサインは、広い中国にあっては全く言葉の通じないことが屢々あり、しかも初対面では敵味方いづれとも判断がつかぬことからつくられたものだった。）

このようにして山鹿は、A・Fの唯一の日本人の同志として、帰国後も両国運動の橋わたし役をうけ

もつことになったのであった。それからまた数日後、同じような経緯で黄興未亡人を中心とする秘密結社大同党V（ダードンタン）にも加入した。

——上海の真ん中、賑やかな広東路の裏通りを幾曲りか行った先の左角に、「黄寓」と表札の出た、高屏で囲んだ一劃があった。この家は、孫文の右腕といわれた中国革命の大立物黄興の未亡人の棲家で（黄凌霜はその甥であった）案内を乞うて入ると、すでに大広間には紫檀の卓と椅子がならべられ入党式の準備がすっかりととのつていた。

どんすの団服をきた中年の大男が、私を迎えて、流暢な日本語で歓迎の辞をのべる。すでに数十人の男女がしずかに席についている。黄興未亡人が現われると、先刻の男がたつて早口で語り出した。「我が大同党は、各人が互に意見の小異をすて大同につくことを主旨として、自由と平和のためにつくす結社である。党規党則はない。ただ入党式で各個人が意志表示するだけが、入党の資格であり条件である」と言う。そして机の上におかれた一枚の長い紙にまず私が署名すると、そのあとへ次々に立って列席者が署名していく。全員が終わると、その紙をとりあげて、みんなに示して見せた上で、火をつけて焼却してしまうのである。そして「これであなたの大同党入党は完了した。この事實は永久に変わらぬ消えないものとして我々の脳裏にやきついている。その証拠に大同党のサインを教えよう」という。このサインは口号（カオハオ）で「君はどこから来たのか？（你打那裡来・ニーダナリーライ）」それに対して、「私は梅先生のところから来ました（ウオダメイシェンションライ）」と答える。

これだけで、黨員はたがいの危急のときには協力互助しあう以外に、何の負担もなく、各人が

それぞれの意志によってただ自由と平和のために行動するといふものであった。

（附記）その席上に、黄興が日本へきたとき日本人婦人との間にできたという姑娘も出席していたが、のち彼女は黄凌霜の夫人となったといふことを聞いた。

三回目の渡支

さて山鹿は、徳田や吉田のすっぱかしのあと、上海の同志たちと思わぬ交流をして日本へ帰ってきた。同行した黄はしばらく横浜の中国学生下宿に滞在し、大杉や村木とひそかに出会ったあと米国へと立ち去った。一方山鹿は妻が妊娠していたこともあって、当分はおちつくつもりで芝の印刷所に文選工として働きたした。

と、一カ月経つか経たずの十一月の二〇日すぎ、山鹿の仕事先へとつぜん大杉が尾行をまいて、風のごとくやってきた。それは「一九二三年の一月末か二月に、ベルリンで国際アナキスト大会が開かれることになった。それにぜひ出席してほしいという通知がフランスの準備委員コロメルからとどいた。しかし日本政府がパスポートを出す見込みはない。それで中国人になって行きたいが、中国旅券の入手はできないか」という相談である。

山鹿にも格別の心当たりはなかった。ただ盲目の詩人でエスペランティストのエロシェンコが、日本を追われたのち、いま北京大学で講師か何かをしているから、それに頼れば北京のアナキストと連絡がとれるだろう。昔は同志でいまは国民党にはいつている連中もいるから、何とかなるかもしれない——ともかく行ってどうかしようといふだけのことである。早速、旅装をととのえた山鹿は誰にも

告げずにその夜の列車にのった。

——東京駅から釜山經由奉天まで三等六〇円で旅券も不用だった。下関の特高の網をくぐって釜山へ上陸すると雪がふっていた。鴨緑江を越す時、朝鮮人はいよいよ憲兵に調べられて多数が下車させられたが、日本人には丁重であっさり通過できた。そして奉天についたが零下八度の寒さで私のゴム靴は凍って、石のように固まり足はふくれて脱ぐにも脱げない。当時私は、師復に接して以来八年間、菜食主義であった。そして師復にならって革類のものは一切使わず、従って革靴もはかなかったのだ、そのときはすっかり参ってしまった。食堂で湯をもらって、やっと凍傷になるところを危うく助かり、靴も革にかえた。

さて奉天から北京への京奉線は、三等に日本人は乗れない。私は苦力(クーリー)の群にもぐりこんだ。満員の三等車は全部堅い板張り、車内は二階作り、下は棧を打った板間でみんな坐りこんでいる。二階のものは脚をぶらさげていて、立つと羊の革の長靴が顔にぶつかってくる。便所が詰まって、まわり一面黄金水があふれている。坐っている人混みの中をしずくのしたたる靴でまたいで通るのだが「借光借光」(ごめんごめん)とさえ言えば誰もいやな顔をしない。切符を窓のすき間に落とした老婆のために帽子が廻されるとたちまち銅貨が集まった。

隙間風が吹き込んで寒いし尻は痛いし、体を小さくまるめてうとうとしているうちに山海関に着いた。汽車は一時間位停っている。車の外へ出て一杯二銭の熱いミエンとチローを食べると生き返る思いがした。それから百姓が売りに来たキジの焼きたての丸焼が三〇銭。そこで私はとうとう、八年来の菜食主義と別れを告げることになったのである。みんなおしゃべりで「你上那

辺去(君はどこへ行く、ニーション・ナビーエンチイ)とくるから困ったが、東京へ留学して一度北京大学へ行くのだとごまかし、とうとう中国人で押し通した。

北京にて

——東京を出てから六日目、ようやく北京の城壁がみえ、痛い腰をさすりながら下車した。北京大学は天安門を入って北へ、底まで凍てついた濠に沿って一キロほどいった左の胡同の奥である。ともかくエロシエンコに会うべく、受付で聞くと、今日は講義が休みで、周作人(魯迅の弟で北京大学ロシア文学教授、エスペランチストでもあった)のところに住んでいるという。

門番に名を尋ねられ、とっさに「高麗人崔陽(ツァイヤン)」と答えたが、これがその後の私の通称となった。訪ねると大きな邸の中の幾曲りかいった一棟にエロさんがいた。ふさふさとした金髪は昔と変わらず、久しぶりであったがよく私の声を憶えていて、早速大きな口から美しいエスペラントが流れてくる。周作人もきて達者なエス語で歓迎してくれ、中日露三角快談に思わず時をすごした。(周の妻君は日本婦人ということだったが中国式で人前に出てこなかった。)

私が北京へ来た目的は、ここではしゃべれない。御馳走になりながら、運動の様子をきくと、北京大学内でもアナキズムはさかんで、学生新聞『努力報』はアナキストの機関紙のようになっているという。また学生グループの中心は陳昆山で、大学にちかい閭難坑(トーチカン)にあつまって、共同生活をしているらしい。訪ねあてた陳昆山は経済科の学生で、セリセフの世界語専門学校で習得したエスペランチスト、快活で頑健そうな活動家であった。

その陳の紹介で出会った景梅九は、日刊紙『国風日報』を経営する国会議員で、日本へ留学当時、張継らと『衡報』を出して追放された経歴をもつ古いアナキストであった。大杉をも知っており、日本語もすこぶる達者で、政府要人に多数知己があるから何とか旅券入手の便法を考えよう、と私の依頼を気軽に引き受けた。

景が旅券工作をしている間、私は陳の家に寝泊まりして、昼間は北京大学でエロシエンコの講義をきいたり、近郊を見物したりしてすごした。陳の家は、みんなの共同炊事であったが、何しろ貧乏学生のアツまりだから、朝昼晩いつもきまってメリケン粉のふかしパン、唐辛子を醬油で練ったものを、竹の箸にちよつとつけて舐めて、それがおかず。豆粒ぐらいの粉炭をコンロに入れて暖房と炊事にするのだが、零下一五度の夜ともなると竹の床ではとても寝られなかった。そんな寒夜、家々で胡弓や琵琶を弾き、国楽を演じている。エスぺラントがとくにうまかった王魯彦（ワンローイェン）は、また琵琶の名手で、古代の亡国の哀歌をうたうとき、その哀切さはまさに身にしみるおもいがした。

ある日城外の露天市場に出かけた。天幕張りの屋台でうる牛雑燴、排骨、ドンクオツという赤い小さなリングを串にさしてアメをながした酸っぱい菓子。講談師が卓をたたいて軍談をやっている。日光映画なんて、進んだような遅れたようなものがある、鏡で照しつフィルムを回転する。それをまた鏡で反射させ円筒を放射形に数本出して、見物は一回二銭でその円筒をのぞくと映画がみえる仕組みである。そこらあたりに売っている品物は、玩具でも実用でもみな手工品で、鍋など鉄板を打ち出した芸術品のような代物ばかりであった。その反対に、古玩と書いた骨

董屋の品物は、ほとんどが中国古代のイミテーション、日本の大阪製のもので、値切れば一〇〇円が一円五〇銭位までになるのは呆れるほかなかった。

北京無政府主義者連盟

山鹿の北京滞在中の一日、かねて陳昆山らが毎夜討議していた北京無政府主義者連盟の創立大会が開かれた。政治的な影響をよくうけた北京では、さきに山鹿が加入した上海のAFの誓詞のようなきびしい方向が失われ、無原則的な国民党への妥協があらわれ出していて、それが内部でも問題になり、紛議的であった。しかし大会は、景梅九の提案で、まず最初に「必要あるときは国会議員となることも、資本家としての新聞社社長になることも一時的戦術としてみとめられる」ことを決定し、景梅九が議長となって進められた。

出席者は北京大学学生が大部分であったが、少数の中年者そして婦人たちも混っており討論はすこぶる活発であった。そして会議は、政府の容共政策などに反対し、大学内に運動を集中し、ひろく全国同志とも連携をとることを決議した。しかし、ほとんど景梅九周辺の仲間によって運営され、その意向のままにつくられたという印象がよかった。景梅九は、当時の有名人の一般的悪弊ともいうべきアヘン中毒にかかっているとのことであった。また寒くて長い冬がつづく北京では、南方とちがって性的な自由が自然に求められるらしく、同志間のそれは一見放縱そのものでもあった。もちろん同志間では、男女平等が原則であって、まず女子の選択権が重んじられることになっていた。結婚制度にこだわらず、欲望にもとづいた快楽ということにおいて、そうなのであった。そしてうわさで

は景は、数人の女性と関係しているが、しかし独占しているのではなく、道德習慣にとられないだけだといわれていた。

山鹿は、台湾から留学していた一洗と共に、外国人代表として出席し、意見を求められたが、何も発言をしなかった。しかし、この景の傾向は、本質的に山鹿が反対せざるをえないものであった。そして、山鹿の憂慮するまでもなく、この北京A Fは、その後の政変で景が北京を去ると前後して有名無実のまま消滅した。また、それ以後に辿った「国民党左派から反共右派」への道は、李石曾、張継その他初期の多くの中国人アナキストが、国共の合作や背離、蔣介石のクーデター、抗日戦という歴史的状况のなかであられた共通の転落コースでもあった。

上海での旅券入手工作

さて山鹿は毎日、国風日報社を訪ねて、旅券工作を頼みにしていたが、中国風ののんびりで一向に進捗している風もない。大杉と上海で落ち合う日も近づいたうえ、上海での入手の方が早そうに思えたので、とうとう北京をあきらめることにした。

——陸路、上海開北チャペイ駅に着いて、すぐフランス租界霞飛路の華光医院に電話すると、数日前に大杉はもう着いて、近所のイギリス婦人の家に一室を借り、私を待っているという。院長の鄧夢仙は、相変わらず穏やかな温顔で出迎えてくれ、手紙で頼んであった旅券入手については、上海の同志たちがいろいろ手をうっていて、もうほとんど目安がついているとのことであった。それは、ちょうどリヨンにある中法大学(李石曾らが創設した中国留学生のための寄宿舎学校)の校長

が、打ち合わせと報告をかねて帰国し、まもなく渡仏することになっていた。

大杉はそこへ留学することとして、広東人台山県生まれ(とくにその地はなまりがひどい)名は唐継(タンジ)とし、写真は唐大杉自身のものを貼って、校長を保証人にして旅券申請を出した。手続きは完了、旅券も出来上がったが、しかし規則で必ず本人が出頭してフランス官憲から受け取らねばならないという難関が残っていた。時あたかも年末年始で休日が続く。船は一月七日上海発マルセイユ行きのアンドレ・ルボン号ときまり、それをのがすと大会にまにあわない。中国の同志の一人が中国忍法よろしく正月休みの仏領事館にしのびこんで、その旅券をぬすみ出して来た。こうして旅券は大杉のポケットに無事おさまった。

このとき私は、上海で中国の正月をはじめてむかえる経験をした。中国では、家々の門の左右に連句を書いた赤い紙が貼られているが、それは毎年大晦日に貼りかえ、新しいものとする習慣がある。それで、私はその連句に無政府主義の句をかいて、戸毎に貼ってまわったらどうだろうかと思った。賛成した夢仙が早速健筆をふるって、数百枚の赤い紙を書き、ついでにガリ刷りの三無主義(法律・宗教・旧道德の否定をいい中国ではアナキズムの別称でもあった)を訴えるビラをもった。

その夜、三人で組をつくり、糊を用意してまず淋しい住宅街の一軒一軒に連句を貼ってまわった。ふりかえると両側の家は何れも無政府主義万歳のことばに彩られて、迎春の気配にみちみちている。ついで徹夜で賑う四馬路の永安公司与先施公司との屋上からビラを一勢にまいた。みんながわあっと騒いで拾うさまを、私たちはそしらぬふりで落花生をかじりながら見物した。(こ

の大海日の行動は、のち上海のアナキストの恒例行事となった。）

さて、大杉の船出を見送ってすぐ山鹿は東京へ帰ってきた。それを待ちかねたように長女のアイノが生まれた。そして大杉の留守中を守る伊藤野枝が妻のミカの産後の世話を、毎日あれこれやってくれたのであった。（このアイノというちよつと変わった命名は、エスペラントのアルファベットAに女性を示す接尾辞 ^ino^ を付けた Aino——一番はじめの女の子——の意味で、いかにも山鹿らしい。）